

問一

- (a) 間隔
- (b) 普及
- (c) 雰囲気
- (d) 起因
- (e) 臨床

問二

自分や他人の肉を食べたり食べさせたりすることよりも、当人の人格性に直結する顔を食べさせる行為は生命体にとってありえないことであり、異様な衝撃を与えるということ。(八十字)

問三

アンパンマンは、自身の人格の同一性を示す顔を持ちつつも、その顔がいくらかでも複製でき取り替え可能であるという意味で、個としての人格を持たないとも言えるということ。(八十字)

問四

臓器移植はドナーの死を待ってなされていたのが、医療技術の進展により、ドナーの生を保持したまま他者へと臓器を移植するという行為も可能な状況が生じているということ。(八十字)

問五

飢えた者を助けるために自らの人格を顕示する顔を食べさせつつも、その顔が複製可能でもあるというアンパンマンの設定は、作者の意図を離れて、医学の進歩が可能にした臓器移植や自己の身体の複製化といった医療技術への連想をもたらし、それらが個々の人格性をも解体しつつあるという現状にすぐれた示唆を与えるものにもなっているということ。(百六十字)

問二
ホ

問二
(a) ハ
(b) ロ
(c) ホ

問三

① 臨終である様子になってしまった

② 仏道への深い理解があり、貴かった僧

③ やはり生きて動いているならその間は

④ 息子が書きたかった文字は「ふ」であるようだ

問四

惟規が、死後のつらさを説かれたにもかかわらず、風流への執着を持ち続けたので、その迷いを断つことはできないと考えたから。(五十九字)

問五

惟規が、三宝に無関心なばかりか、都の知人を慕い、帰京を望んで生に執着する和歌を詠んで死んだこと。(四十八字)

問三

問一

- ① よろしくーべし
- ② おもえらく
- ③ すなわち
- ④ また

問二

(ア) 私はどうしてそなたが経典を学んで身につけ儒教を教授する官職につくことなど望んだりしようか。

(イ) そなたは忙しいから学べないと言うが、王である私ほど忙しい者など誰もいない。

問三

孔子が寝食を忘れて学び、光武帝が戦いの中でも学び、曹操が年をとっても学問好きだったように、そなたも自分から学問につとめ励まなければならぬ。

問四

戦いに優れているだけで無学だと思われていた呂蒙が書物を広く読み、魯肅と学問上の議論ができるほどの学識を身につけた状況。
(五十九字)